雜稙

雜類

畫図笠全巻之一

畫図笠全巻之六

雜類

毛邊紙裏紙打様

先素こ分厚き紙をゆし羽重にして深石まく紙の端と麽切てくい
さに紙のゆすへしの方ともよめ此して粉麩の粉まて續てまきとく
ひよたらしの素ちゆをゆし刷毛もて濃き墨へし又張る紙とたら
の横に幅ま此て切て用色を板の上にたらし墨て表と下まて刷
毛ま水と付くてつくと打かけ又ざくと水とあし引て巳初にて切
年さる紙を取て表と下にゆしたらしの素ま高く右手乃方に紙と
少し返てたらしに粉と付刷毛もて拭ま又裏紙の左に方の上下の
角と揃て右脇の方に引へし裏紙乃表と上まなし横まに引て

筑前直方　林守篤　編輯

ちゝめ粘とかゝる而いつ重よ曲せて上下の紙の表よ粘を引て上下の角とあゝよふくゝれ初れくたゝし上よ被りけて上より水をけ
ふて拭なるべしてゝ〳〵を時の口傳と云に力わ也い皺に水より拭分
まこゝろを和のに見るとれ田の面よと拭なるそこ指に引かゝる史
ぬれ者ひゝる而いるゝくと卷よをて又を流も粘乃ごく汁業ゝり
打を乾流て他の而へ挂て乾し室を後礬水として日用よ
後色〻但屏風乃上張よい地とせゝして用ゆ

礬水之方

黄明膠 十匁 明礬 五匁 水 三升 先膠と五匁に泡し
柔よ成ゝる時器物の中へ熟湯と入く手と任ゝ度ゝ膠の和
ゝる時明礬の粉と投て搖まぜ冷して後刷毛まくたゝしまゝ引べ

又地してぬるゝる時をまく裏の耳よ粘を付て紙張了
ゝゝ付て中に風を吹今るもよし○たゝしを数よ水を合
完又紙多ハ七匁扇風よハ五匁ほてよし○又方膠十匁
明石六匁○圖繪よ良ハ膠をまし礬ゆし冬ハたゝす
多くにゝとおしとなよ

毛邊紙假張之方

膠地しゝたゝしの表よ水を引て返して裏のまゝとよ粘を
付て又をを中に水を引て表よをて引起し紙張よ押付水刷
毛を以て擦張ゝる史但し紙とお切て裏紙乃孫の左れ隅の端に
付色て後剥明よ色より鬼を入ゝ史張て後にゝゝゝゝゝゝ

粉本紙入袋様

美濃紙よ地をして堅くこまかく一二度も煮うへしく
とけて日を強て皺伸るしたれと根元に板入とは底四方ともに
紙乃うらに粘を付てつくるよし

焼筆

奥槙乃木を筆乃ごとく削て中ゆき方に火を付原は捏て火を
消用也又紙を包ても消て此焼筆まて中法を好く描て恰好成
又合せ好く又要く付て根よて叶く掃落して臺よて平面し
描強て后根よて能くへし畫史よ拓筆とあり拓木を用也

霧焼筆

描うんと思ふ所なの裏よ焼筆と付て是を画紙の上よ蓋

上よりは常よてくけバ下よ様うつるらりと是と云て描く

碁盤割

是は大なる圖を小さくする又は激を圖を大よせんと云時よ必
是合る紙ものを時彼局とも罫のごくこうり描紙をも同く
割て其局を合て写をとこを罫の寸方ハを時の大小よ法ひ
罫の数八間数ます新く是を碁盤割と云地様乃時よすること
地様ハ或ハ屏風の畫なをとうんてうれを小く紙よ写字又ハよを
乃て大よするか底のこゝや

念紙作方

反紙とも面紙とも云ふ楊原紙を柔よ揉て皺を熨斗炭
と細末し酒よ付てあれを煉つをたゞくとして前もよ付て揉る

紙を付て用ゆるし描へき紙の上に炭粉の貼らぬ方を下にし
蓋を重て又その上に粉本を重て竹篦にて推写しを下す
写りうるを望として描し色を念推と云

藁筆作方

拙を寒中の米泔に浸し毎日水を易て六七日に及て取出し
鉄槌にて打碎き和けて筆管の形を纏て苞て用る墨
筆の穂樹の葉のごとく尖りぬなり

朱砂一色之方

艾をよく揉て寒中の清水にて曝し日よわし又もて水にて
煮き白にかし〻朱と蓖麻子の油と入て交合るし仕朱とその榴
木にてすり黄色をなして用ゆ底る沉さをとれし又黄蠟灰砂

胭脂等を加へるもよし

箔推方

屏風などに箔を貼まんとせは丁子の煎湯をぬりそこ
湿気を引くるを貼し箔の虫くひのべて紙をこそり胡桃の
油を淡かし塗て箔のしよ蓋ばる紙ついてわるし色をふ
のり引る上に推付るし箔著みて挾てつるし筆の一方より
綿に入て色よく推しそ手する時に指をそ手し又地は合黄
土をぬりて金箔を貼つるを色あしくは又粘を引て二度
まはをし　○貼箔のしよ書と手はい油気とをへし紙と数
を上に熟灰を重し熟るをふして油気をなし

箔盤作方

鹿或ハ鹿の皮と有四方みちすなどの板れ面ヨ奉書紙
をのべて置そこと草まて張ヲ用と都まて仕用也

箔切方

箔盤のヒに箔を一枚置て竹刀を以て十文字ヲ裁
ねよく拂ひ筆ヨ糊を師ヨ入てふること

師作方

簡の節とを切て大中小の目をうちくヨ作置て切箔の
大小ヨ隨て其の目乃筒ヨ入て振ること

砂子振方

地ヨ泥を引そこに砂子と師ヨ入てふりうを置乾こと
時筆こ或ハ古毛ヨ振毛等ヨ絞ひこさるもこ

（紙箔

を押さこヨ磨水を淡くいさひず

泥引く方

金泥を絞だけヨ付て地紙とするこさい時ハ墨の泥引を
せめこくいおく

彫塗

色ハ墨ヒのさてこめて墨れこヨ挂さるこいヨ墨と生
て彩をすること

殺塗

没骨こ塗ハ色ハ墨ヒといもびーて金体ヨ挂て彩を
ゆるここと

（紙塗

墨色のうすきハ水し打過てゆるくとし胡粉をあらハ必ず
隈掠 曲のうすき所用
色しハ彩色とする時ハ一方とれ消ることくらい時ハ墨と
二ヶ所ひとつ色のみ付る筆を濃筆といふ
濃淡彩
色ハ用し色ハ紅花奥よりて濃きに濃ゆるとし和の宮女の
袖にかと皆重用ますく紙ハ朱重用の時ハ胡粉ゆり
曲りけ一さに肉色又濃肉色丹朱とぬ山ゆるなり
仏色も皆色に準じて志彩色一
掠濃
孔ぬりして端と掠と多ハ肉色とハ別る濃のはー処と

掠ることり又胡粉のくらもハ表のるるとし皆掠ゆ
濃しを深ゆを掠里濃ゆと掠らしてぬしるよ
○朱 丹 肉色 燕脂 具 黄土具 藤黄具 褐 紫ハ
生ゑんしゅ 掠る又褐と英とい茶ゆてもく新濃葱青
墨ゆて掠里 緑青ハ草緑或ハ白緑 紺青ハ群青 胡粉
ハ肉色ゆて掠孔
繪帛張臺方
帛ハ大さゆ為して木と以て四角ゆ作ること屋ゆ張ゆる
みはと紙と漆く切て密又基ゆ飯粘とぬりまとフ
帛をとり付て大の紙ゆ粘を付て帛のうへゆ貼てよし表
乃方ゆ膠地をうして乾ゆるゆハ地ぬりと帛の

畫の方より紙にしてゐるこれは皆ゐのゆ一表より一
よりるこれとすり時粉のことに糊を張おこりてあり、

板描畫方

膠と竹月明石指をれ木ちく入て此をとりてトぬりを
黄土具よくゐる人紙かとい此よたらうと塗ぬそみくさ
おあんたなり

繪絹

糸用お海のふーて所繻ちくと清白ゐうて繪筆みさよし

墨

ゐ朔の製いそちるこいやしーかま此りを用て如し和の製の
新ちいい新よ光澤ありてよーー拓すとさるる墨ハ時ゐ乳

ちくてあ、

筆

毛ちくく根つまりて腰のつよく毛先揃て割さるよし

硯

紫石青石より長門の赤間ゐ硯の宮河より出るがよし

紙

毛邊紙い官紙を以て上品とんあれと越て吉とさら
さるものよーーこれお海ゐよ淡黄赤ちる物よーー白色より
吉色ゐ有り探ぶ色ーー

屏風押畫

上下と宮紙ハ押畫紙を屏風の一周緣より中まく

一方より右へ折て紙を三つに割て上より下へそつと巻む
但し巻の寸法一を下に加へべし横の寸法は縁より左右に用ゆ又表れ端乃こ枝は入れぬの方を化と
同すれて竪へ入れ方を挽くするなり

屏風縁寸法

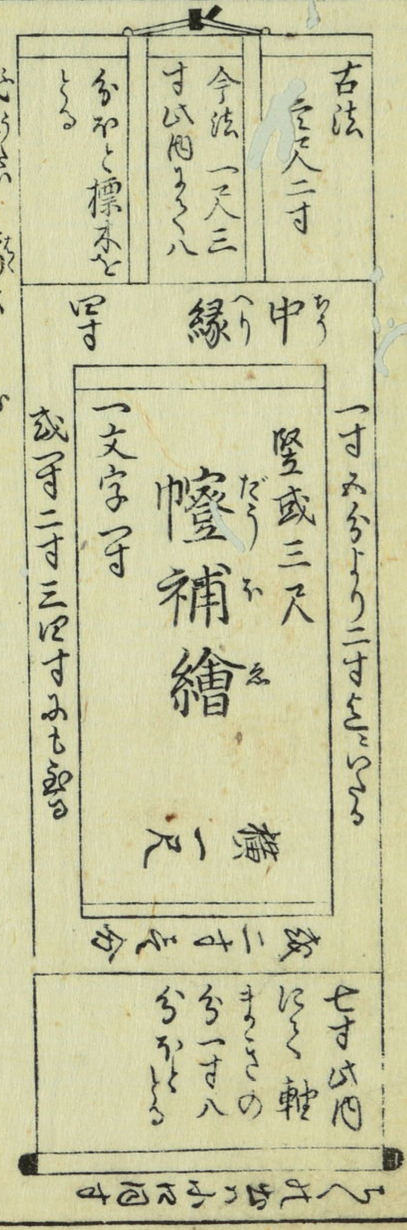
壱五寸人の時は縁乃廣さ七八分但小縁尺に小縁は
弥分ま三分と壱さこ壱人に弥一寸三分横三尺人壱さ
八九尺乃時は二寸七八分なり

屏風色紙短冊及畫之貼様極秘傳

色紙を巻り様に横を巻むた右と尺合く押し巻と
角と云巻れ角を巻れ又弥なり〳〵

押を立と云巻は六つ巻もたれど又三ツ七、半と
いふまといふともかとつはおさべを紙紙尺半方畫ホ
を均〳〵ましめるを用じ上下たたのす法を巻めく
巻すより均〳〵とめく中はいろうみもす色し
巻の紙乃あるは御製の字、強と表れ仏物を
墨畫は上位に推へ〳〵弥つ三巻なく色おし〳〵るる乃
すを極て遠てめやうにす色〳〵そすのまと用て
紙札と色紙とのるのすに巻むと上下のす法はとのす
乃まるを後のすと〳〵との寸分一を加へ〳〵右好す
の者れ大秘事なり

表具六寸法定式　裃立之秘傳



風帶の幅六寸

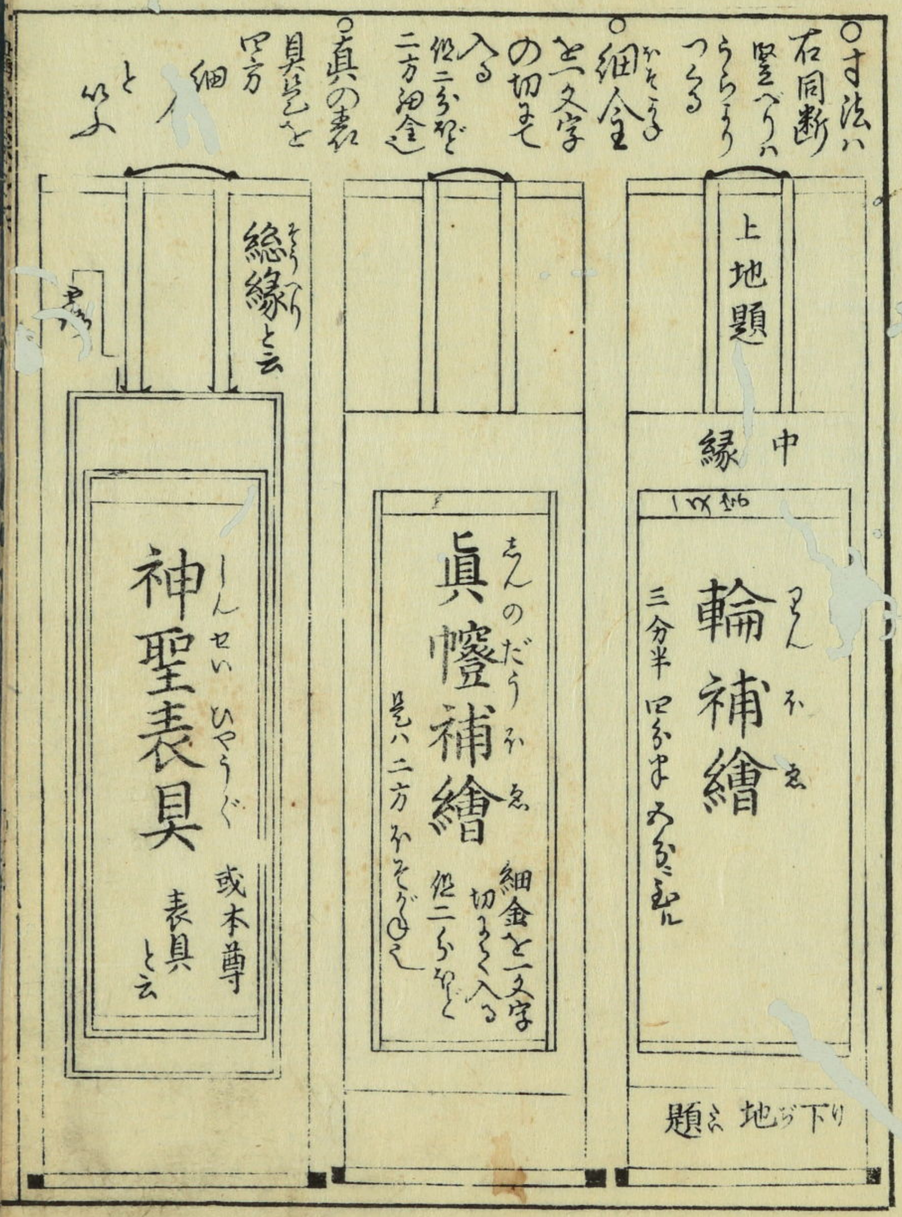
絵のすがたいかなるとも大旨掾の二倍をよしとす

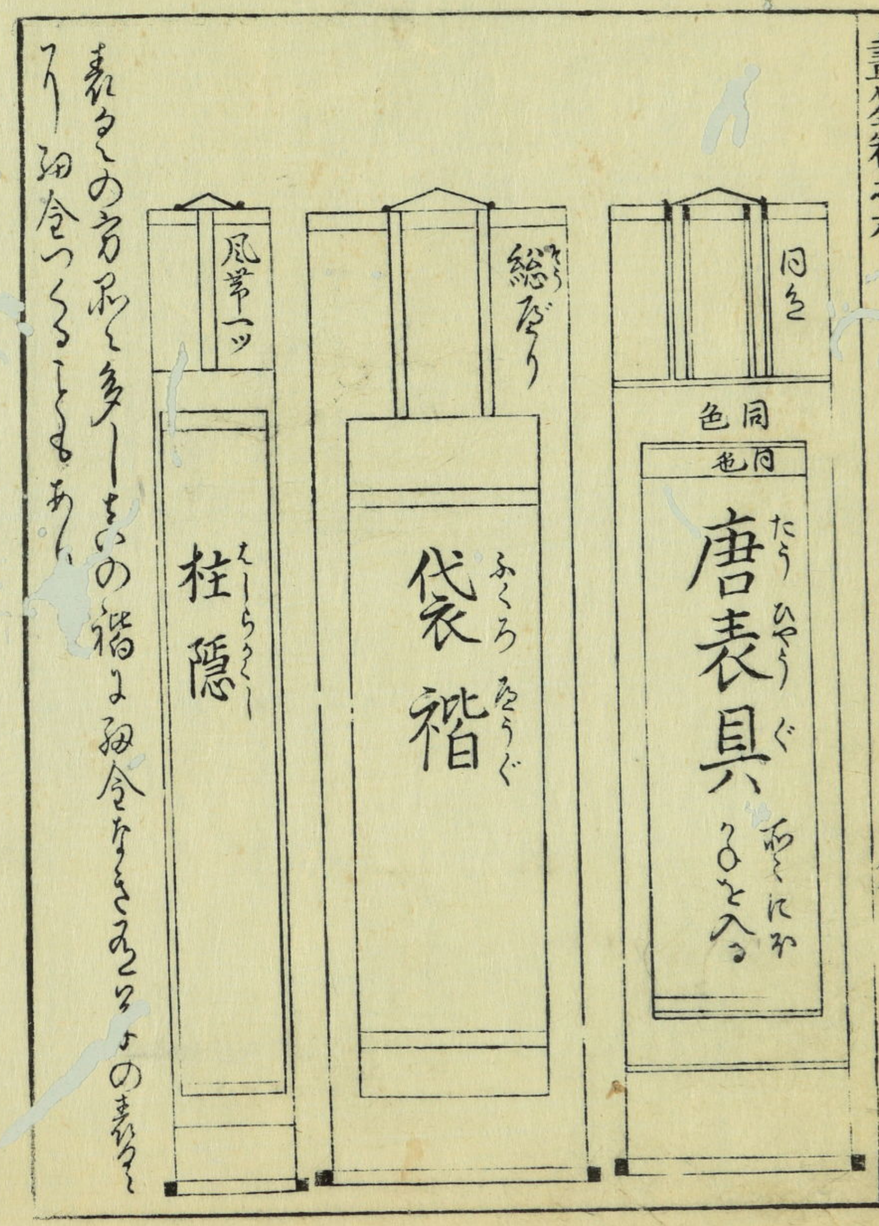
一文字ものはい中孫は上類一尺二寸なれとも此内うつして

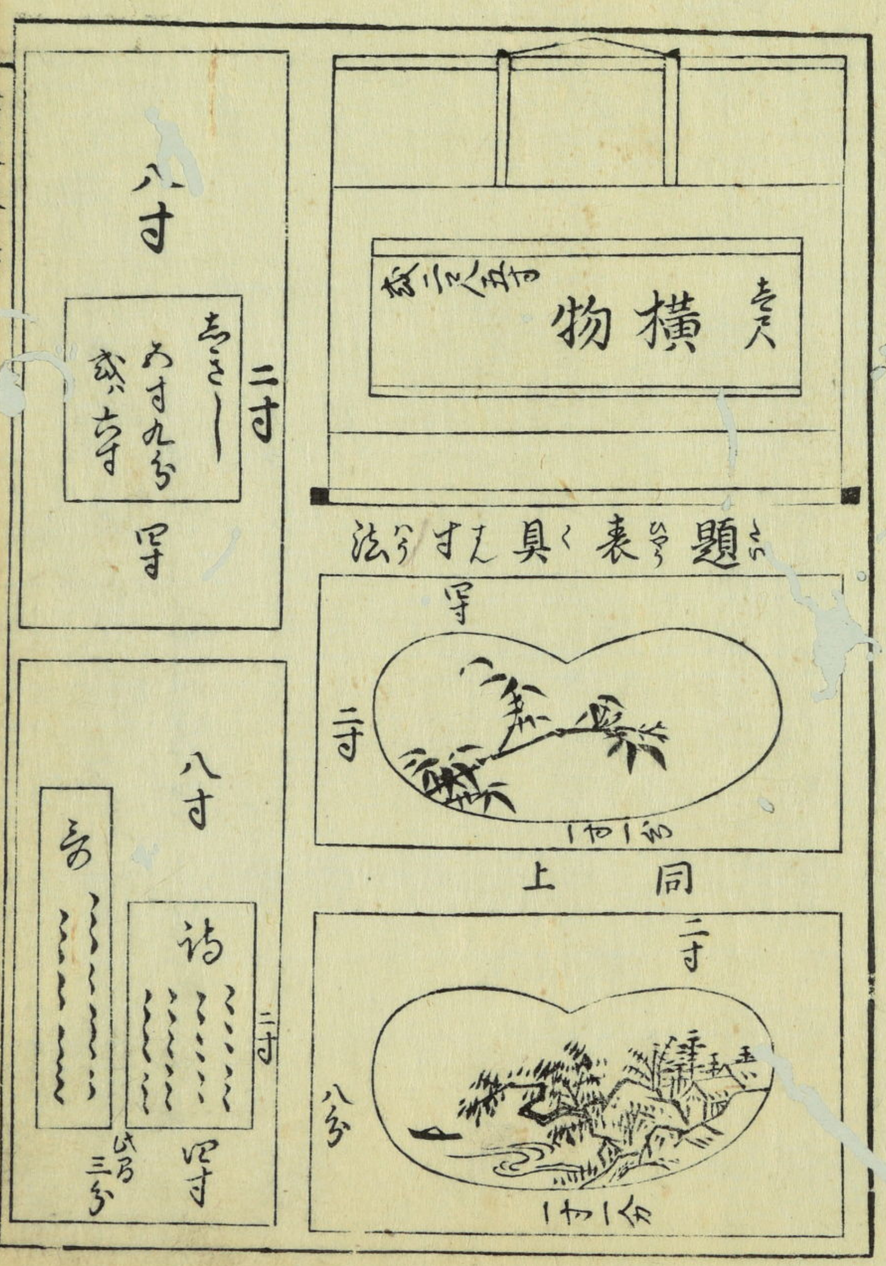
一分とかくて下に用る標木のそばなる○竪の中縁掾の廣

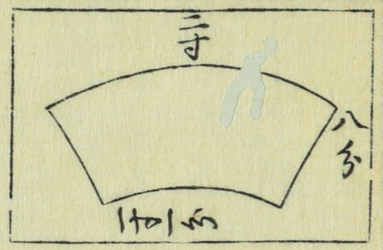
とだうかうと云同く挾とつまんかうと云説もあれとも○

驚壇の用三ケ所ともに用すべし縁おりてよう有




同色
同色
唐表具
表にかゝると入る
総ぢり
代衣褶
風帯一ツ
柱隱
表紙の方形を多くしたいの褶は和合をなさるものの表紙
り和合つくるものあり


横物
題表具法
八寸
二寸
高さ
八寸
二寸
同上
二寸
八寸
詩
二寸
八寸
三寸



たいつもとす法定式ありといともかく
ちゝへうす皆大畧なり趣祈の恰好を
いくたの定すの自に配當してお意する
掛りもべし

表具作方

はんを紙をあをを引てかり張ようけ色はん法の書入方に
あをを付うゝ紙をたて掛紙を用て糊粘よて裏打
張入表とかよて、紙張よ付色離して能ようさり
扱一文字を付中縁又上下を付軸挾の紙をつけ

掛ゝぬ紙よて裏とす張て別中縁の無りよりも表
の方へ引うゝ風帯を付色乾て好法の書をかに
して紙張よ付とりよ軸持の紙を付てうゝ色四
方日を強てゝ乾て表掛を載せ畳表をうらを
すり掛よ軸と標木を付てうれをとす法を付る
に掛あり○巾表をの時に表掛をさゝぼりをして
掛地表をうゝ○降風帯ハ一文字と同色
付風帯ハ中縁と同色

膠粘作方

色月雪をとれてあらゝ掛麩を煉壺よ入中ア
ま把を立てつよ掛麩を煉壺をたくもよし膠をてつよを

糊粘をかけ四へ一大幅物ハ粘つよく小幅ハうすくして
面一ニ有まい麹室ニ入るなり

屏風張方

先釘をとめてつぎ紙をする四角ハ神板を敷るこう
又ハ氷だるとまべし張紙て糸を面一次ハんのと鋸
骨ニ粘を付一次ハこの押へをして揚を截揉つぎハ
をすべし板を用ハ大さ骨ニ厚さ分余揉つぎの紙ハ厚
ひくさとうしろと合せ張をして乾とること勿
と云こなりて切次ハ浮だるとする事だるうハ粘をつけ
骨ハつまぶ浮だるのとハ表張をすべし下の一段
をとりて屏風をさらさゆるこなをちぶ乃

とをとるなり先ハて裏表六箇之裏ハ浮張のこと二三
箇なりて粉地とすべし方ハ白堊百目墨を多ト太細
末して水ハて溶り粘を加へて引へし次ハこんまくを
と煮て糊ハて揚を加へて摸を付へし

蝶尾す方

四尺の屏風なること上下とみすふして中と四つとなる乳
六尾なり大小ハ倍くハ又ハなり

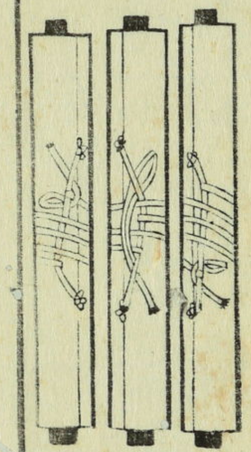
縁附方

古法の一文字通と云ハ先ハ孫を付て摸を揚と通ハ
尚流の留と云ハすこうすこ切合するこ故ハ出合ハ云こ

軸物巻切方

然ハ白ん軸をうざ切りて奥乃紙の後ろ糸
と能のほと能合を打て打用ハ粘ると付て軸ハ表と
別ハ鬱紙乃掛ハ小ク切る紙を少く小に仕表を付て
軸と一方ゝ掛入表ハ一分半内ハ押入ゝ式
軸の小口を目当ハして切ると又一方も加くの如くして細
も方より軸末と突出し引抜て見ハ粘と付く
掛入る

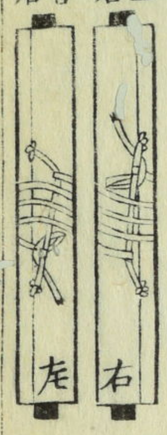
掛繪三幅一對之事



掛ハ上ん中ゑと入て表と紙と解
下に至て風帯とかとしおを掛
軸を掛り付半ハ挟て掛あゞり

床へ入り釘ハ掛て軸をさゝくと切ろし撒をして又
右乃方とおのゝくかけ次ハたとかけ出ん表紙ハ三幅
皮ハ印の方へ引へし〇とづし掛ハ右れ方ハ引つしを
紙ハ右乃方へ斤傍を出したハて結び出る引印乃
ある方し次ハ左乃方とつしを紙ハたの方へ斤ハ表を
出しハ右の方ハて結び出る別京の方し次ハ中ゑとつし
表紙をとり正中へ引出し中ハて遠へて三引出しわな
をとゝの方へ入れ之ハ入るも同し

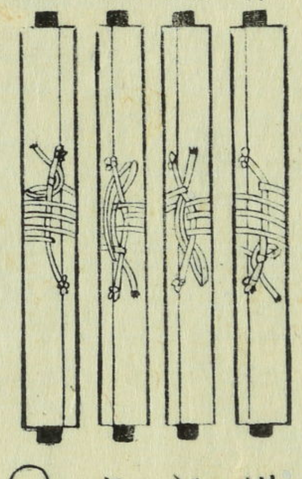
同二幅一對之事



掛ハ上左の方ハ右を次ハ掛
右れ方ハて掛ハ表紙ハ京乃

方へ引へし〇そつし掛ハ掛ようをそつし印乃方へ
掛とゝ〻を出し図のごとく掛ひ止終次よ上座ち
方も同ゝの方へ掛と汁者を掛ひ掛む掛て第ニ入る
文法乃止つを加ゝ高もゝと次てたゝと知るゝ

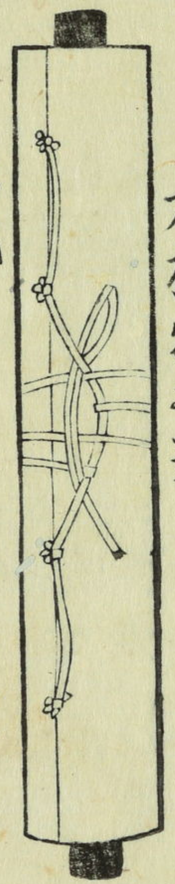
四幅一對之事



掛掛ハ中の二幅の内客石より
初め次よ主石とかけ次よ脇乃
客石より掛ケ主石よて掛収ゝ
〇そづし掛ハ脇のをゐをを
そつし〻乃方よりをを出し〻くゝとを収ゝ又脇乃
客ねをそつし掛ハをを中代方よりをを出を同おゝ

ひよ中のをを石をそづし正中へをを掛を引ゝとめ
わふをを〻乃方へなほ〻次よ客ねをそつを仕ゝ
やう同おなゝ

大横物之事

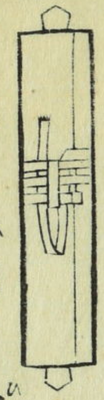


掛掛ハ掛掛ハ掛掛ハ

柱隱之事

掛畫ハ常ハ一幅物と同しき畫を中そりたるものに

圖の如くなる畫を笛へ指物結方

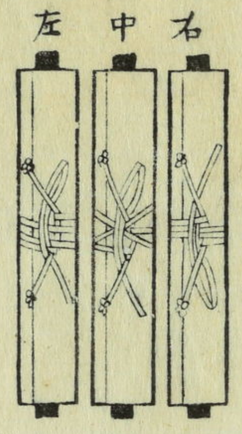


てをさへ緒を捻て加うごんを次て押畫しわなの
ごとく為おなをして一節を向く引出をし○をてをて不
をして下るハ仲の一節出さる様を抜て引あなとく
る心抜を表紙の内よりの也下に金物をとる又ハ物を
緒をとるくとをさてとえ如くをとれ一巻をとる
をしらう大概上をの汲心抜をの人のおうてを

掛圖ハ組せよ
ぬくへし

又方緒ハたの方より引

三幅對秘方



緒ハたいたのをと次て引たいたの
をと次て引ぬく中巻ハ中のわ
ちる方を抜心抜をを神ることたる
たをを迎を右ハ右を迎をを又長い七巻まいし物ハ巻を巴
草ハ三巻を巴ハとる

掛畫可人渡支

廣筆を入て中をて渡すて下を金て巻ハ空をす
注の巻を指ハををめの方へ注ハ人の方へ注ハ指を金へ

掛れ人の[illegible]ねあるて一三幅の時ハ客ねい向うねハ
吾ら[illegible]して置し

同床掛事

三幅の時ハ中をうけ次ぎ客位ハ主なる同主て納ら
ハ客中主なり

同見方

書院ゟ[illegible]間を[illegible]人ゟ通を[illegible]ぶくハ三尺中客
主と見[illegible]

同絵置方之事

絵の[illegible]ある方に[illegible]ハ[illegible]
あし、

同床掛礼

家ハ紙を一張しきたの[illegible]を家の[illegible]ハ[illegible]
ハ張をかけ[illegible]ハ[illegible]
時風[illegible]

同主位客位

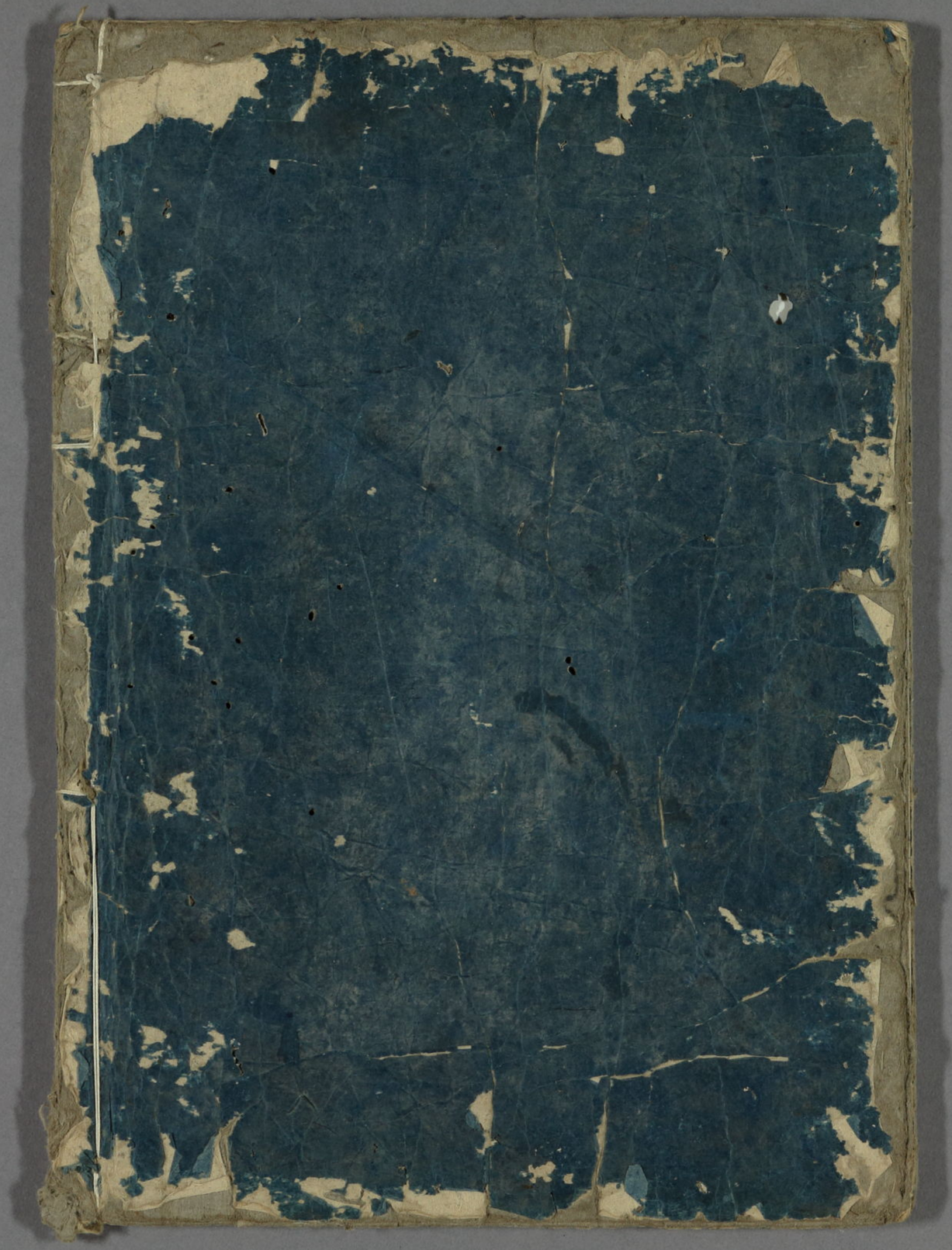
たを[illegible]又[illegible]
と[illegible]客南より入る家ハ三幅対の内
南向の位二幅共時ハ北ハ主位南ハ客位[illegible]
見て及ル

同掛畫掛字包法

張と二重にして一分の[illegible]

又おゝ形出ー又おの濃うゝ彩くゝとかゝて中ゝ畫ゝを
入ゝて包ゝ中ゝを彩ゝて後ゝ大小ゝ形の太ゝ筆ゝ
白繪ゝ屏風
嫁入のゝ時ゝを用ゝ絵ゝ鶴亀松竹或ゝ花鳥ゝを胡
粉ゝて描ゝ銀泥ゝを用ゝ雲模ゝ彩地ゝ雲母ゝを用
ゝ縁ゝ白帛ゝふちゝを白塗ゝる

享保六辛丑歳季夏吉日

浪花書肆　伊丹屋茂兵衛
同　新兵衛連刻

中塚氏